

御めぐら歌鳴物譜

上
八龍お
雲琴

は し が き

吾が教の御かぐら勤めは「陽氣手おどり」でござるまして「人が勇めば、神もいさむ」と仰せ下されました通り、勤め人数の手がそろひ、心が揃ふて致します時は、めぐらし助けふしぎな助けは随所に現はれるに相違ないのでござるます。

又、おつとめと申しますのは神様におつとめ申すこととござるまして、その手振り、足踏のすべては「理ふり」と仰せ下されてあるのでござるますから、心から正直に神様におつとめ申すための「理ふり」でなければなりません。即ち口で言ふこと、身で行ふこと、が違ふてゐるは「理ふりのおつとめ」とは申されないのでござるます。

然るに國とこゝろへまゐりまして御かぐら勤を拜まして頂きますのに、舞人（お勤衆）と鳴物（地方衆）との調子や拍子がマチ／＼である事を見受けるのでござるます。これもやがては一手になる日があらう事とは思ひますが、要するにこれは鳴物の中の絃物（いともの）が主になつて、すべての調子立てが出来てゐないからであらうと思はして頂きます。

それでこれまでも何とかしてこの絃物だけでも、本統の調子立てが出来るやうに努めさして頂きたいものと心密かに念じて居りましたところ、今まで手づけをさして頂いたかたく

のおすゝめによりまして、この度菲才の身も願ず、なるべく判り易いやうに心して鳴物の中の「絃物の譜」を出さして頂くことになりました。

つきまして特に申上げて置きたい事は、この譜の中に初めの二十一へんのお歌が「あーしきはーらい」となつて居りますのと又、どの下りにも最後に「なむてんりおふのみこと」として「なむ」を入れてありますのは、私は元、永尾の奥様（芳枝様と申されます）に教へて頂きましたのでござりますが、永尾の奥様は教祖様から直接に手をつけて頂かれたお方でござりまして、私にも其の「お手つきのまゝ」を教へるから一と申されました。お手をつけて下さいましたので、私もその理を重んじて教へて頂いたまゝを出すことに致しました。なれども只今では、御本部から出て居ります御かぐら歌によつて舞行されて居りますのでござりますから、そこはお地方についておつとめ下さることを御願申して置きます。

大和の地場にて

武 谷 つ ね 上 述
編 者 議

昭和四年六月

凡 例

一、お琴のひび

お琴は二はお歌の最右に一、二、三の数字にて書き表はしてあるやうに、手許の方から数字の通りに弾くのです。（但し、お琴の譜は、琴の前方から、手許の方へ、一、二、三、……九、十、斗、爲、巾、と呼ぶのが普通なのでありますが、どんなお素人にも判り易いようと思ひまして、手許の方から一、二、三と示したのであります。）

シヤンとしてあるのは、十三絃目のあたりを中指にて手前の方へかき鳴らすのです。

又左の手は三の糸と五の糸とをひくとき子より左の方で糸を軽く指先にて押へるのです。

二、琵琶のひび

琵琶は二はお歌の右の数字の中央であります。

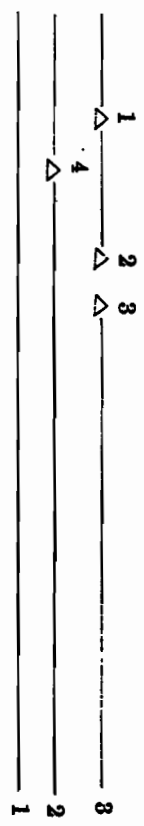
糸は太い糸から一、二、三とかぞへて数字に合せて弾くのです。

左の手はコマの下から二番目と三番目のコマとの間のところを良いかげんに押へておくのですが、出来れば、三の糸を弾く時は下から一のコマと二のコマとの間で三の糸を紅さし指で押へ二の糸の時は、下から二のコマと三のコマとの間で二の糸を人さし指にて押へ同じ二の糸をひく時でも、八雲の譜が四になつてゐるところは下から一のコマと二のコマとの間を中指にて二の糸をおさへる事にすればよいのです。

三、八雲について

八雲——は右の方、即ち目でひく方は糸数は琵琶と同じですから、そのころで左の手のコマの方だけ圖のやうにかぞへてお歌のすぐ右の数字によつてコマの上を押入るのです。左に圖を示します。

八雲さまの順序



例へば「一………」としてあるのは「一〇コマ」………「のある間お入ておくのです。

四、調子(糸の立てかた)について

音の調子——はお琴は平調子にして、琵琶はお琴の手許から十一本目の糸と、琵琶の一の糸とを合せ、又お琴の手許から、九本目の糸と琵琶の二の糸とを合せ、三の糸はそれより半音高くするのです。八雲はお琴の十三絃目の糸と一の糸とを合せて二上りの調子にすればよいのです。

五、弾き方について

以上申しましたことによつて大概お判りの事とは存じますが、四下り以下は、三下り目の調子と大概同じですから省くことに致しました。なれども中にはお歌の一字多い所や、少ないところで迷はれる方もあると思ひまして、お歌全首を載せることにしましたから、お地方を稱へながら弾いて下されたら、お手が自然に動いて行くと思ひます。

又、七下り目の

十下りのたび………といふところは恰度一首の長さだけ多いのでござりますから、同じお手で繰返せばよいのです。

又、十一下りは特に手の加はるところがありますので便宜上、お手の加はるところだけを踏つけしてござります。

その他に八下り目の三つ、十一下り目の二つ、十二下り目の三つ等は、お地方のふしむわしで一手や二手の違ひがござりますから、それは三下り目までの譜をござらんになれば應用出来るのですから、そのおつもりでお手を動かして下さい。

— 凡例了 —

御かぐら歌鳴物譜

(季、琵琶、八巻)

(季)
(琵琶)
(八巻)

一つあゝしきはあらいたあすけたあまへてんりをのみこと
三四 二六 三四 三四 三四 四 一三三 二二二 三三三 一三三 三四 二五三 一三三 三三三 三四 二六 四二五 三三四 三三四

(以下これに準ず)

一つちよいはなしかみのゆうことさいてくれあしきのことをはい
三四 二六 三四 三四 三四 一三三 三三三 三四 二五三 三三四 一三三 三四 三三四 一三三 三四 三三四

はんでなこのよりのちいとてんとをかたどりてふうふをこしら
一三三 三四 三四 四二五 三四 三四 三四 四 一三三 二二二 三四 三 一三 三四 三四 四二五 三四 三四 一三三 三四

へきたるでなこれはこのよのはじめだしなむてんりをのみこと
 三 四
 一 三 三
 三 四
 三 四
 四 二 五
 三 四
 三 四
 一 三 三
 三 四
 三 四
 四 二 五
 三 四
 一 三 三
 三 三
 三 四
 三 四
 二 六
 四 二 五
 三 四
 三 四

よきよし
 三 四
 四 二 五
 三 四
 四 二 五
 三 四
 三 四
 三 四

一つあしきをはあろてたあすけせきこむいちれつすましてかんろう
 三 四
 二 六
 三 四
 三 四
 三 四
 四
 一 三 三
 二 三 二
 三 三
 一 三 三
 三 四
 二 五
 一 三 三
 三 三
 三 三
 三 四
 二 五
 三 四
 三 三

だい
 三 四

一つよろづよのせかいいちれつみはらせど
 三 四
 二 六
 三 四
 一 三 三
 三 三
 三 四
 一 三 三
 二 三 二
 一 三 三
 三 二
 三 二
 二 三 二
 一 三 三
 三 四
 一 三 三
 三 四
 三 四
 三 三
 一 三 三
 三 四
 三 四
 三 三
 三 四
 二 六
 二

むうねのをわかりたものわない
 四 一 三
 二 五
 二 五
 一 一 三
 二 二
 三 四
 二 六
 四 二 五
 三 四
 三 四
 一 三 三
 三 四
 二 六
 二 六

そのはづやといてきかしたことわない
 三 四
 一 三 三
 三 三
 三 四
 一 三 三
 二 三 二
 一 三 三
 三 二
 二 三 二
 三 三 二
 一 三 三
 三 四
 三 四
 一 三 三
 三 四
 三 四
 二 六
 二 六

しらぬがあむりでわないわいな
 四 一 三
 二 五
 二 五
 一 一 三
 二 二
 三 四
 二 六
 四 二 五
 三 四
 三 四
 一 三 三
 三 四
 三 四
 二 六
 二 六

このたびわかみがをもてへあらはれて

シヤン五
四一ニ五
二ニ五
一ニ五
二ニ五
三ニ五
四ニ五
一ニ五
二ニ五
三ニ五
四ニ五
一ニ五
二ニ五
三ニ五
四ニ五

このところやまとのぢばあのかみがたと

シヤン五
四一ニ五
二ニ五
一ニ五
二ニ五
三ニ五
四ニ五
一ニ五
二ニ五
三ニ五
四ニ五
一ニ五
二ニ五
三ニ五
四ニ五

このもとをくはしくさいったことならば

シヤン五
四一ニ五
二ニ五
一ニ五
二ニ五
三ニ五
四ニ五
一ニ五
二ニ五
三ニ五
四ニ五
一ニ五
二ニ五
三ニ五
四ニ五

きいたくばたづねくるならめてさかす

シヤン五
四一ニ五
二ニ五
一ニ五
二ニ五
三ニ五
四ニ五
一ニ五
二ニ五
三ニ五
四ニ五
一ニ五
二ニ五
三ニ五
四ニ五

かみ 三四
 が 一三三
 だ 三三三
 へ 三三三
 な 一三三
 に 二二三
 かい 一三三
 さい 三三二
 き 二二三
 と 一三三
 く 三三三
 なら 三三三
 ば 二六六

せ 四一
 へ 二五
 かい 二五
 い 一三
 ち 三三
 れ 四二
 つ 二五
 い 三三
 さ 一三
 む 三三
 な 四二
 り 二六

い 三四
 ち 一三三
 れ 三三三
 つ 三三三
 に 一三三
 は 二二三
 や 一三三
 く 三三二
 た 二二三
 す 三三二
 け 一三三
 を 三三三
 い 三三三
 そ 三三三
 ぐ 三三三
 から 二六六

せ 四一
 かい 二五
 の 二五
 う 一三
 こ 三三
 ゝ 二六
 ろ 四二
 も 三三
 い 三三
 さ 一三
 め 三三
 か 二六
 け 二六

な 四二
 む 三三
 て 一三三
 ん 三三三
 り 三三三
 を 三三三
 の 三三三
 み 二六
 こ 四二
 と 三三
 よ 三三
 を 四二
 し 二五
 よ 四二
 し 三三
 よ 四九

一 下 目

一 三四
 つ 二六
 し 一三三
 よ 三三三
 う 三三三
 が 三三三
 つ 三三三
 う 一三三
 こ 二二三
 ゑ 一三三
 の 三三二
 さ 二二三
 づ 三三二
 け 一三三
 は 三三三
 や 三三三
 れ 三三三
 め 二六
 づ 三三三
 ら 三三三
 しい 二六

い 四一
 い 二五
 い 二五
 い 一三
 い 二五
 に 三四
 つ 二六
 こ 四二
 り 三三
 い 一三三
 さ 二二三
 づ 一三三
 け 三三二
 も 二二三
 ろ 三三二
 た 一三三
 ら 三三三
 や 三四
 れ 二六
 た 三四
 の 一三三
 も 三三三
 し 二六
 や 二六

さあんにいさんざいころをさだめ
四一 二二 三三 四四 五五 六六 七七八九

よを、つようのなかあいつ、りをふくう
四一 二二 三三 四四 五五 六六 七七八九

むう、つうむしやうをにでけまわす
四一 二二 三三 四四 五五 六六 七七八九

なあなつうなにかにい、つくりとるならあ
四一 二二 三三 四四 五五 六六 七七八九

やあ、つうやまとはほうねんや
四一 二二 三三 四四 五五 六六 七七八九

このつこ、までついてこい
四一 二二 三三 四四 五五 六六 七七八九

とさどとりめがさだまりた
四一 二二 三三 四四 五五 六六 七七八九

なむてんりきのみこと
四一 二二 三三 四四 五五 六六 七七八九

なむてんりきのみこと
四一 二二 三三 四四 五五 六六 七七八九

二下り目

一 三 四
つとんとんとんとんとしようをが 三 三 二
つうをどりい 三 三 二
はじめはやれお 三 三 二
も 一 三 三

しろい 三 四
二 六 六
二 六

ふうたつうふしぎなあふしんか 三 三 二
ればやれにぎわしや 三 三 二
い 一 三 三

みい 三 四 二 五
つうみにつくうよをつよなをり 三 三 二
い 一 三 三

い 三 四 二 五
つういづれもつきくるならば 三 三 二
い 一 三 三

むううつうむほんのねえをきろう 三 三 二
い 一 三 三

なあなつうなんじふををすくひあぐればあ 三 三 二
い 一 三 三

四つようくをこゝまでついてきた
 じいつのをたすけはこれからや

五ついつもわらはれそしられて
 めづらしいたすけをするほどに

六つむりなねがひはしてくれな
 ひとすぢいごゝろになりてこい

七つなんでもこれからひとすぢに
 かあみにいもたれてゆきまする

八つやむほどつらあいことはない
 わあしもうこれからひのきしん

九つこゝまでしんぐしたけれど
 もをとのうかみとはしらなんだ

とをどこのたびあらはれた
 じいつのをかみにはさうゐない

なむてんりをのみこと
 なむてんりをのみこと

- 三つみづとかみとはおなじこと
 - 四つよくのなれものなけれども
 - 五ついつまでしんじんしたとても
 - 六つむごいこゝろをうちわすれ
 - 七つなんでもなんぎはさゝぬぞへ
 - 八つやまとばかりやないほどに
 - 九つこゝはこのよのものとちば
 - どうでもしんじんするならば
 - なむてんりをのみこと
- こゝろのうよごれをあらひきる
 - かあみのうまへにはよくはない
 - やううきいづくめであるほどに
 - やさしきいこゝろになりてこい
 - たあすけえいちじよのこのところ
 - くにぐにいまてへもたすけゆく
 - めづらしいところがあらはれた
 - かうををゝむすぼやないかいな
 - なむてんりをのみこと

六下り目

「つひとのこゝろといふものは うたがいゝぶかあいのなるぞ

- 二つふしぎなたすけをするからに
 - 三つみなせかいのむねのうち
 - 四つようこそつとめについできた
 - 五ついつもかぐらやてをどりや
 - 六つむしようをやたらにねがいでる
 - 七つなんぼしんぐしたとても
 - 八つやつぱりしんぐせにやならん
 - 九つこゝまでしんぐしてからは
 - とうどこのたびみえました
 - なむてんりをのみこと
- いかなるうことをもみさだめる
 - かゝみのうごとくにうつるなり
 - こうれがあたすけのもとだてや
 - すゑてはあめづらしたすけする
 - うけとるうすぢいもせんすぢや
 - こゝろえゝちがいはならんぞへ
 - こゝろえゝちがいはてなほしや
 - ひとつのうこうををみにやならぬ
 - あふぎのううかゝひこれふしぎ
 - なむてんりをのみこと

七下り目

- 一 つひとことはなしはひのきしん
 - 二 つふかいころがあるなれば
 - 三 つみなせかいのころには
 - 四 つよきぢがあらあばいちれつに
 - 五 ついづれのかたあもおなじこと
 - 六 つむりにどうせといはんでな
 - 七 つなんでもでんぢがほしいから
 - 八 つやしきはかみいのでんぢやて
 - 九 つこゝはこのよのでんぢなら
- とうどここのたびいちれつに
たねをまいたるそのかたは
- なむてんりをのみこと なむてんりをのみこと
- にいほいゝばかりをかけておく
 - たあれもうとめるでないほどに
 - てんぢのういらあぬものはない
 - たあれもうほしいであらうがな
 - わあしもうあのをちをもとめたい
 - そをこはあめいゝのむねしだい
 - あたへはあなにほどいるとても
 - まいたるうたねへはみなはへる
 - わあしもうしつかりたねをまこ
 - ようこそうたねへをまきにきた
 - こうえをおかずにつくりとり

八下り目

- 一 つひろいせかいやくになかに
 - 二 つふしぎなふしんをするなれど
 - 三 つみなだんゝとせかいから
 - 四 つよくのころをうちわすれ
 - 五 ついつまでみあわせいたるとも
 - 六 つむしやうをやたらにせきこむな
 - 七 つなにかこゝろがすんだなら
 - 八 つやまのなかへといりこんで
 - 九 つこのききろうかあのいしと
- とうどここのたびいちれつに
- いゝしもうたちきもないかいな
たきれにいたのみはかけんでな
よりきたあことならでけてくる
とをくとうこゝろをさだめかけ
うちからあするのやないほどに
むうねのううちよりしあんせよ
はあやくうふしんにとりかゝれ
いゝしもうたちきもみておいた
おもへどうかみいのむねしだい
すみきりいしましたがむねのうち

九 下 目

- | | |
|------------------|-----------------|
| 一 つひろいせかいをうちまわり | いつせんゝにせんでたすけゆく |
| 二 つふじゆうなきよにしてやろう | かあみのうごゝろにもたれつけ |
| 三 つみればせかいのこゝろには | よをくがあまじりであるほどに |
| 四 つよくがあるならやめてくれ | かあみのううけとりてけんから |
| 五 ついづれのかたあもをなじこと | しいあんさだめてついでこゝろ |
| 六 つむりにてようとゆうてない | こうごろうさだめのつくまでは |
| 七 つなかゝこのたびいちれつに | しつかりいしあんをせにやならん |
| 八 つやまのなかてもあちこちと | てんりいわうをゝのつとめする |
| 九 つこゝつとめをしていれど | むうねのをわかりたものはない |

とてもかみなをよびだせば

はあやくうこもとへたづねてよ

なむてんりをのみこと

なむてんりをのみこと

十 下 目

- | | |
|------------------|----------------|
| 一 つひとのこゝろとゆうものは | ちよとにいわからんものなるぞ |
| 二 つふしぎなたすけをしていれど | あらわれへてるのがいまはじめ |
| 三 つみづのなかなるこのごろう | はあやくういだしてもらひたい |
| 四 つよくにきりないごろうみづや | こうごろうすみきれぐらくや |
| 五 ついつゝまでへもこのことわ | はなしのうたねへになるほどに |
| 六 つむごゝろことばをだしたるも | はあやくうたすけをいそぐから |
| 七 つなんぎするのこゝろから | わあがみいらみであるほどに |
| 八 つやまひはつらむらものなれど | もうとををしりたるものはない |

九つこのたびまでへはいちれつに
とうどこのたびあらわれた

やまひのうもとをわしれなんだ
やまいのうもとをわこゝろから

なむてんりをのみこと

なむてんりをのみこと

十一下り目

一いつひのもとしよやしきの

かあみのうやかたのぢばさだめ

二二つふうふぞううてひのきしん

こうれがあだいゝちものだねや

三つみればせかいがだんくんと

もををこうたのをてひのきしん

四つよくをわすれてひのきしん

こうれがあだいゝちこえとなる

四六三
三二二

三三三
三三三

三三三
三三三

三三三
三三三

二二二
二二二

四二二
四二二

三三三
三三三

三三三
三三三

五ついつくまでへもつちもちや

まだあるならあばわしもゆい

六つむりにとめるやないほどに

こうころうあるならたれなりと

七つなにかめづらしつちもちや

こうれがあきしんとなるならば

八つやしきのつちいをほりととりて

とをころをかへゝるばかりやて

九つこのたびまでへはいちれつに

むうねがあわからんさんねんな

とうどことしはこへおかず

じふぶんものををつくりどり

五五五
二二二
四四四
三三三
三三三
三三三
二二二

やれたのもしいやありがたや

なむてんりをのみこと

なむてんりをのみこと

十二下り目

一いつらちだいくのうかといた

なにかのをことをまかせおく

二つふしぎなふしんをするならば
 うかひひたてへていひつけよ
 三つみなせかいからだん／＼と
 きいたるうだいくににほひかけ
 四つようきとうりやうがあるならば
 はあやくうこもとへよせておけ
 五ついづれとうりやうがよにんいる
 はあやくうかといたてよみよ
 六つむりにこいとはいはんてな
 いづれへだん／＼つきくるで
 七つなにかめづらしこのふしん
 しかけたあことならきりはない
 八つやまのなかへとゆくならば
 あゝらきいとうりやうつれてゆけ
 九つこれはございくとうりやうをや
 たてまへとうりやうをこれかんな
 とうどこのたびいちれつに
 だいくのうにんもそろひきた
 なむてんりをのみこと
 なむてんりをのみこと

↑「か」入り
 昭和三年まで
 入っていた。

—丁り—

昭和四年六月廿日印刷
 昭和四年六月廿六日發行

奈良縣山邊郡丹波市町大字三島八〇
 天理教々會本部雅樂部

右代表者
 編輯者 喜 多 秀 太 郎

印刷所 天理教々廳印刷所
 奈良縣山邊郡丹波市町大字川原城三〇九

右代表者 植 田 五 郎

御かぐら歌鳴物譜

はしがき

御かぐら歌に

やまのなかでもあちこちとてんりわうのつとめする

と仰せ下されてあるやうに、やがて「三千世界は陽氣手踊り」で眞實の感喜生活が送らして頂けるやうになるであらうと思ひます。

然るにその陽氣手おどりに使用せられる鳴物については、從來餘りに閑却視せられてあつた傾きがありますが、いつも舞人（お勤衆）と、地方（鳴物衆）とは須く、はなれ／＼であつてはならんものと思ひます。

そこで神様も

「心の調子を合せ」

と仰せ下されてありますが、これは御かぐら勤め鳴物について御伺ひなされた時のお言葉であつて、その當時の信仰からすれば、唯心の調子をへ合せれば、鳴物の調子などはどうでもよかつたのも知れませんが。

然し、御かぐら勤めには、その舞人があり、その地方がある限り、鳴物の調子も自然に合せて行かねば、如何に心の調子を合せやうと思ふても、それは出来得ない事であらうと思ひます。

言ひ替ましたならば、心の調子を合せるといふことは、引いては鳴物、そのものゝ調子が合ふて來るといふことを仰せ下されたのではなからうかと思ひます。果して、理のあるお方のお彈なされる、絃物の調子とその他、替も

の、打ち物等に至るまで一線亂れなき立派な調律が大殿堂に響き流れて、地場の靈氣に緩和するのを耳に致し、それが心の及びます時、その神々しき音律の中から「理の尊さ」といふ感念が深められてまゐります。

いづれ、ゆく／＼は此の心の調子が合ふて出来たところの鳴物も一手になる日のあらうことゝは存じますが、本書によつて學ばれる人も、常にこの心の調子を合せるといふ理を忘れずにお勤め下さることをお願い申します。

又お稽古の際にも必ず、神様にお願ひ申してから、始めることを怠つてはなりません

編者識

凡例

一、拍子木について

すべてお囃子は拍子木を中心として行はれるべきものと思ふが、お歌の内容を打ち消すおそれあつてはならず、それで太鼓も、笛も、又拍子木も、その調和のよろしきに於て妙なりと云ふべく、唯拍子木の打ち込みは調子の角度をあやまらざるやう心すべきものとす。

二、太鼓について

太鼓は強からず、弱からず、迫らず、緩まず克く拍子木の角度を耳にして打ち込むを心すべし。右撥、左撥の使ひわけも肝要なり。又小撥（又は女撥とも稱ふ）の数も多からず、少なからず、而して耳障りにならぬやう心せられたし。（但し、かう打たねばならぬといふやうに切りきつてはないのであるが）

太鼓の入れ方によつて絃物の調和を缺くが如きは（ふうふそろふて……）の神意に照して最も慎まざるべからざるなり。

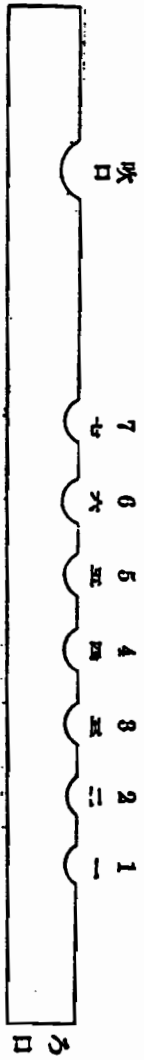
猶ほ●●の中に○印の手は（又ハその打ち方もある）と云ふ意なり。

三、笛について

(1) 調子の「アヤ」といふは、これ節（ふし）といふも同じ意なれど、アヤ多くして卑しさを増す畏れあるは、奏するものゝ人格の劣なるを表はすものなれば、克くほど／＼にアヤなしてこそ技（わざ）妙なりと云ふべし。

- (ロ) 笛の譜は二様現はしたれど数字の二五三といふのは全部琴を主として立てたる調子ゆゑ、この指穴の運用よろしき時は、地方の聲も自然に緩和せられ、鳴物と歌聲の調和に於て實に天上夢界を辿る思ひを起さしむべし。
- (ハ) 又、235の記號を用ひたるは、琴の調子と全然異りたるにはあらず、唯お國のなまりといふものがあつて略尾の上るところと下るところのある關係上二様に現はしたるものに過ぎざるなり。故に出来得べくんば、二五の記號に依りて修得せられんことを望む。(但しお地方によりて手を替へることは自由なり。)
- (ニ) 記號中(フニ……)とあるは、和音(フクラおん)とも云ひ又(ヲおん)ともいふ。その略符號なり。されど活字の組合せ上(フニ……)とお歌の文字とが、そろへかぬるところもあれば、これもお地方を稱へながら合せられたし。又(六七三……)とあるは琴のコロリンと云ふ所にして三に下るトタンに七を閉閉する手なり。

笛の調子は(六本調子)といふ音調の笛を使用せられたし。(但しそれであればならぬと云ふことなし)これによつて笛の「二と琴の「一とを合せて立てれば二上りの調子となるべし。左に笛指穴符號を記す。



笛 六本調子

猶ほ235といふ洋数字を用ひたる指穴に於て666、などの場合に於て(タタク)のが普通であるが活字の配置の都合上(タタク)記號を使用し得ざるにより、六ク又は、七クの記號と照合せて(タ、ク)ことの際用をされることと自由なり。

— 凡例了 —

御かぐら歌鳴物譜

(太鼓、拍子木、篳)

あしきをはらふてたすけたまへてんりおふのみこと

ちよいとほなし。かみのいふこときいてくれ。あしきのことおは

はんでな。このやうのぢいとてんとをかたどりて。ふるふをこ